

### 3 AntiCD3抗体によるマウス実験的自己免疫性ぶどう膜網膜炎モデルの検討

(眼科学) 毛塚 剛司、横井 秀俊、竹内 大、

坂井 潤一、臼井 正彦

(血清学) 水口 純一郎

(目的) 網膜に存在する自己抗原であるIRBPをマウスに免疫すると実験的自己免疫性ぶどう膜網膜炎(EAU)を発症させることができる。EAUはその発症にCD4陽性Tcellがエフェクターとして働いていると言われており、その活性化にはTCR-CD3複合体も重要なファクターである。このため、EAUの発症にCD3が関与しているかどうか検索を行った。(方法) 牛IRBPを用い、B10.Aマウスに強化免疫し、その群とは別に強化免疫+抗CD3抗体の群を作成した。そして、2ヵ月後に病理学的検索、リンパ球増殖試験、サイトカインの検索を行った。(結果) 抗CD3抗体注入マウスではぶどう膜網膜炎の発症が抑制され、IRBPに対するリンパ球増殖反応は(-)であった。サイトカインの検索では、IL-2、IL-4、IFN- $\gamma$ 、全ての産生が抑制された。

### 4. リンパ球のグルココルチコイド感受性の疾患別特異性について

(東京薬大臨床薬理) ○平野俊彦、本間真人  
岡 希太郎

(東京医大八王子 医療センター) 櫻井悦夫、松野直徒、  
小崎浩一、吉田雅治、

玉置 透、小崎正巳  
(東京医大第三内科) 対馬裕典、新妻知行、  
伊藤久雄

4種のグルココルチコイド(GC)に対する末梢血リンパ球の感受性を、健常者(98例)、慢性腎不全患者(122例)、気管支喘息患者(40例)及びネフローゼ患者(20例)の各群間で比較した。ヒドロコルチゾン、プレドニゾロン(PSL)、メチルプレドニゾロン(MPSL)、及びデキサメタゾンに対するリンパ球の感受性は、各群間で異なっていた。また、これらGCのリンパ球抑制効果に基づく力価比は、従来の抗炎症効果に基づく力価比とは大きく異なり、いずれの被験者群に対してもPSLの薬効が低くMPSLの薬効が高かった。

### 5. 関節軟骨の破壊とサイトカイン

東京薬大(第一生化学) 森 陽、伊東 晃、能勢 卓

すでに演者らはRAにおいてIL-6が、IL-1と共存下で関節細胞外マトリックスの分解に促進的に作用することを報告した(Arthritis Rheum. 35 1197-1201, 1992)。今回はウサギ関節軟骨細胞を用いて、マトリックスメタロプロテアーゼ(MMPs)とそれらのインヒビター(TIMP)の産生に及ぼす加齢の影響、さらにIL-1刺激時のproMMPs産生に及ぼすPGE<sub>2</sub>や非ステロイド性抗炎症薬の影響について検討した。

【結果および考察】無刺激の場合、TIMP-1は加齢とともに産生量が増加したが、proMMP-1および3産生は変化が認められなかった。しかし、IL-1刺激下においてproMMP-1および3産生は加齢とともに増加した。PGE<sub>2</sub>はproMMP-1、3および9産生を抑制したが、インドメタシンやジクロフェナックはIL-1単独およびIL-1+TPA処理によって誘導されたproMMP-9産生をさらに促進した。これらの結果から、IL-1により産生されたPGE<sub>2</sub>がproMMPs産生に対し一部ネガティブフィードバックをかけていることが明らかとなった。

### 6. ATPにより誘発された気管支痙攣の2症例

(内科第3講座) 玉木利和、清水園子、小林真人、  
久保隆之、松村康広、露口都子、福田俊明、  
山本 忍、対馬裕典、新妻知行、林 徹、伊藤久雄

近年、発作性上室性頻拍(PSVT)に対する7-テノシ3リン酸2ナトリウム(ATP)の急速静注療法が一般に広く用いられている。今回ATP静注により気管支痙攣が誘発された2例を経験したので報告する。

(症例1) 66才、女性。48才発症の気管支喘息患者(非アトピー型、通年型、慢性型)。PSVTに対しATPを静注したところ喘息発作が誘発され、酸素、β<sub>2</sub>アドレナリン、アミノフィリン、ステロイドの投与で軽快した。

(症例2) 62才、男性。喘息歴なし。MDSにて入院中、心嚢液および左胸水の貯留を併発。熱発を契機にPSVTが出現したため、ATP静注したところ呼吸困難が出現した。酸素、アミノフィリン、ステロイドの投与で軽快した。

ATP使用に当たっては気管支痙攣を引き起こすことがあり、十分な注意が必要である。